

日本の女優第一号、川上貞奴 波乱万丈な一生

1 日本一の芸妓へ、水揚げは時の総理大臣 伊藤博文

1872年、東京・日本橋の両替商・越後屋の12番目の子供として誕生。生家の没落により、7歳の時に芳町の芸妓置屋「浜田屋」の女将、浜田屋亀吉の養女となる。

伝統ある「奴」名をもらい「貞奴」を襲名。芸妓としてお座敷にあがる。日舞の技芸に秀で、才色兼備の誉れが高かった貞奴は、時の総理伊藤博文や西園寺公望など名立たる元勳から轟頂にされ、名実共に日本一の芸妓となった。

2 川上音二郎との出会い、結婚 アメリカ巡業で 女優としてデビュー、脚光を浴びる

1894年、自由民権運動の活動家で書生芝居をしていた川上音二郎と結婚した。しかし当初は苦労も多く、音二郎の2度目の衆院選挙落選により資金難に陥る。1898年に2人は築地河岸よりボートに乗り、国外への脱出を図るという挙に出たこともある。この試みは失敗し、淡路島に漂着して一命を取り留めた。

1899年、川上音二郎一座のアメリカ巡演に同行した。一座の巡演に関する報道にはこれまで誤りが多く、現在分かっている限りの真相は、井上理恵著『川上音二郎と貞奴 世界を巡演する』（社会評論社2015）に明らかにされている。巡演中は日舞を披露していた。サンフランシスコ公演で、公演資金を興行師に全額持ち逃げされるという事件が発生し、一座は異国の地で無一文の状態を余儀無くされたが、在留邦人の支援などで苦境を乗り越える。シアトル公演で後々有名になった『芸者と武士』を川上が生み出し、エキゾチックな貞奴の美貌と写実的な演技が評判を呼び、瞬間に欧米中で空前の人気を得た。

1900年、音二郎一座はロンドンで興行を行った後、その同年にパリで行われていた万国博覧会に招かれ、会場の一角にあったロイ・フラー劇場において公演を行った。7月4日の初日の公演には、彫刻家ロダンも招待されていた。ロダンは貞奴に魅了され、彼女の彫刻を作りたいと申し出たが、彼女はロダンの名声を知らず、時間がないとの理由で断ったという逸話がある。8月には、当時の大統領エミール・ルーベが官邸で開いた園遊会に招かれ、そこで「道成寺」を踊った。貞奴の影響で、キモノ風の「ヤッコドレス」が流行。ドビュッシーやジッド、ピカソは彼女の演技を絶賛し、フランス政府はオフィシェ・ダカデミー勲章を授与した。1908年、後進の女優を育成するため、音二郎とともに帝国女優養成所を創立した。

1911年に音二郎が病で死去。遺志を継ぎ公演活動を続ける。ほどなく貞奴は大々的な引退興行を行い、『日本の近代女優第一号』として舞台から退いた。



ベルリンでの貞奴

3 初恋の人、福澤桃介と結ばれ、名古屋の二葉御 殿に住み、明治・大正・昭和を生き抜いた

福澤諭吉の娘婿で「電力王」の異名をとった実業家・福澤桃介（旧姓 岩崎）との関係も話題を呼んだ。桃介との馴れ初めは1885年頃にさかのぼる。馬術をしていた貞が野犬に襲われるのを、学生だった桃介が制したことでも2人は恋に落ちる。1年後、桃介は諭吉の二女・房と政略結婚。この後、貞奴と桃介は長い別離を挟む。しかし、女優を引退した後の貞奴は、再び悲恋の相手だった桃介と結ばれる。事業面でも実生活でも桃介を支え、仲睦まじく一生を添い遂げた。2人並んで公の場に姿を現し、桃介が手掛けた大井ダム工事の際も貞奴は赤いバイクを乗り回し、現場を訪れ、他の社員が尻込みする中を1人桃介について谷底まで向かったという。

1920年頃、2人は同居を始めた。2人が名古屋市内で住んだ邸宅は「二葉御殿」と呼ばれ、政財界など各方面の著名人が集うサロンとなった。現在は復元・移築され、「文化のみち二葉館」として再生している。作家の長谷川時雨は、初老にさしかかった桃介と貞奴を見かけた折に「まだ夢のやうな恋を楽しんでいる恋人同士のやうだ」と驚き、記している。

2人のロマンスは、1985年にNHK大河ドラマで『春の波濤』の名でドラマ化された。

明治・大正・昭和の時代を生き続け、第二次世界大戦後の1946年、膵臓癌により死去。享年75。その亡骸は、名古屋の貞照寺に埋葬された。